

ペティの「富」の増進把握に拡大再生産的視座が入りこんでいるか否かは、重要な問題である。この点でわれわれは、生産過程が価値形成⇨増殖過程として把握されていないかぎり拡大再生産⇨蓄積視座が確立しているとはとうていいえないにしても、「余剰利得」と社会的分業の増進による生産過程の生産力的発展とが不可分の関係におかれていると考えられるかぎり、それへの道を具体的に歩きはじめていると考えている。この点では渡辺輝雄氏の見解と対立する。

『政治算術』の検討をふまえてもう一度問題にしたい。渡辺輝雄、前掲書、一〇九〜一二二ページ。

(23) 渡辺氏は、『租税貢納論』における「現実的富」からの直接的徴税方法と、『賢者には一言をもって足る』における「富」還元しての課税との相異を問題にされ、そこにペティの「資本富」把握が介在していることを強調されている。しかし、われわれは、渡辺氏の「資本富」⇨「蓄財」把握には疑問を残していること、そして、ペティにあつては、個人的支出⇨現実的富が基準として二著作ともに貫徹していることから、両者のあいだに基本的な相異をみることはできないのである。渡辺輝雄、前掲書、第一編、第一章参照。

共同研究室

昭和四十六年度第一回研究会（四月三十日）

▼テーマ（統）・戦時労働市場について

報告者 三好正巳氏

（報告要旨は第二十巻・第一号論説の項に掲載）

昭和四十六年度第二回研究会（五月七日）

▼テーマ 社会主義のもとでの「使用価値と価値」

報告者 芦田文夫氏

（報告要旨は第十九巻・第四号・第六号資料の項

に掲載）

昭和四十六年度第三回研究会（五月二十一日）

▼テーマ 「ソ連邦における社会主義五〇年の実践と当面す

る諸問題」

報告者 小檜山政克氏

報告要旨 問題の意味 こんにちは社会主義の再検討、ある

いは社会主義とは何かということについての問い直しの必要が叫ばれているが、すでにソ連邦において社会主義社会が五

十年という一つの歴史的期間実在し発展してきた以上、マルクス主義者はソ連邦における実践に照らして自己の社会主義理論を検討してみなければならぬし、また今やそれが可能となっている。報告はそのための一つの試みである。

一、マルクス、レーニンの社会主義社会についての考えをもう一度復習してみると、

(一) 科学的社会主義の原理の創造者であったマルクス、エンゲルスは、生産手段の私的所有の廃止、そこからくる人間の労働の新しい形つまり商品生産の消滅と生産の計画組織を社会主義社会の本質とみていた。(二) この原理の実行者であったレーニンは、社会の生産全体を人民がよく計算、管理することこそが共産主義の第一段階の要といとみなしたが、同時に将来への見とおしとして、真の共産主義社会における労働とは、社会のための、報酬めあてでない、自己の内的欲求としての労働であり、人間のこのような労働態度の確立、新しい人間関係の創造こそが、最も気高い仕事であるとした。

二、このような原理にもとづいてつくられたソ連の社会主義は、これまで五〇年間になをやりとげたかといえは、それは基本的には、生産手段公有にもとづく社会主義生産関係

をつくり出し、守りぬいてきたことであり、更に今後もそれを守りぬいていけるだけの経済力をつくりあげたことである。

このようなソ連邦社会での労働者階級の役割がどうなっているかは、マルクス主義の原理からみて重要な問題であるが、その場合労働者階級を固定的なものともみるべきではなく、流動的なものとみて、とくに労働者出身のインテリゲンチヤの指導的役割に注目すべきであろう。

報告ではまた、技術進歩の中でのソ連の労働者の活躍の問題や、現在のソ連の勤労者の生活水準などを考えるための、若干の資料が紹介された。

三、それではソ連経済が当面している問題はなにかといえは、それは米国の半分にしかならないその労働生産性を高めることであろう。ソ連の現在の生産性がなぜこのように低いのかは、軍事力の強行的発展の必要、資本主義国からの技術封鎖等々広い意味での生産関係の側からくる種々の制約があったことも考慮されなければならないが、さてこの生産性を高めるにはどうしたらよいかといえは、やはり生産設備の建設の速度をもっと早め、また新しくできた設備の利用効率をもっと高めるために、いろいろの工夫をしなければならぬ

だろ。

四、報告では最後に、近年ソ連邦で実施されてきたいわゆる「利潤方式」つまり経済改革をめぐる理論問題について、ソ連経済学界の論争の若干が紹介された。

この問題は結局、社会主義というのは商品生産社会なのかそうではないのか、という点に論争の核心があり、モスクワ大学のツアゴロフ、ヘッシンらは、社会主義社会は本質的には商品生産社会ではないという原則的立場を擁護するために闘っており、したがって、社会主義社会を商品生産の一種だとするレオンチェフその他の新説、さらにはいわゆる「市場社会主義論」——社会主義経済の中で市場や価値法則に大きな役割をもたせようとする立場を、鋭く批判している。

(なお報告の内容は近く同文館から出版される越村、石原、古沢編「現代資本主義の構造分析」の第四編に収められる)

昭和四十六年度第四回研究会(六月四日)

▼テーマ 分配論について

報告者 甲賀光秀氏

(報告要旨は本号論説の項に掲載)